

巡礼と救済

—四国遍路とその他の巡礼との比較の観点から—

河野昌広

今年で5回目を迎える「四国遍路と世界の巡礼」シンポジウム・研究集会であるが、今年のテーマは「巡礼と救済」であった。救済というのは、巡礼・遍路研究における核心的なテーマの一つである。とりわけ、近年の巡礼・遍路におけるスピリチュアリティ的な動向と、伝統的な巡礼・遍路との比較対照を考える上で、キー概念の一つといえるだろう。

今回の公開シンポジウムでは、熊野詣と西国巡礼が事例としてとりあげられた。また、研究集会では、古代末期のキリスト教巡礼、中世ヨーロッパのキリスト教巡礼、江戸時代後期の四国遍路などが事例としてとりあげられた。

全体の報告を通して論じられたのが、四国遍路における救済は、キリスト教巡礼や西国巡礼、熊野詣などと比較して、曖昧であり、全体像がつかみにくいということである。

この点に関しては、筆者も同意をるところである。この要因として考えられるのが、巡礼や遍路のシステムを維持・存続させてきた母体の違いである。

キリスト教巡礼においては、教会組織が、そのシステムの維持・存続について果たしてきた役割が極めて大きい。それに関しては今回の研究集会での報告でも語られていたが、キリスト教国教化やそれに伴う異教徒との争いと、巡礼が深く関わってきたという経緯がある。また現在でも、たとえばサンチャゴ巡礼ではアルベルゲ(albergue)とよばれる巡礼宿の存在が知られているが、これらを運営しているのは教会組織である。

また、熊野詣においても、今回のシンポジウムでの報告にもあったように、熊野社の果たした役割は大きい。

このように、四国遍路以外でとりあげられた巡礼では、教会や熊野社など、組織や制度が、大きな役割を果たしてきた。

それに対して、四国遍路の場合は、それらに相当する組織を考えると、十分なものが存在したとはいえない。四国霊場会¹や高野山が、それに相当するものであるが、他の巡礼と比較した場合、その影響力の相対的な低さは否定のしようがないであろう。そこが、四国遍路が民衆に支えられた巡礼といわれる所以である。

四国遍路におけるこれまでのキーパーソンをみても、中興の祖といわれる宍弁真念こそ高野山との関わりが認められるが、他には、中務茂兵衛、種田山頭火、宮崎建樹²、串間洋³など、みな、霊場会・高野山とは直接の関係はない人びとである。

つまり、四国遍路においては組織だった教えや理念を見出すことが比較的困難であり、そのことが、全体としての「救済」観を抽出することの困難につながっているのではないかと考えられる。

さらにいえば、近年その傾向がより強くなっているということがいえると思う。それに関連するのが、本稿の冒頭でも述べた、遍路・巡礼におけるスピリチュアリティ的な動向である。近年の歩き遍路の動機をみると、「歩く」、「四国の文化に触れたい」、「沿道の見知らぬ人との交流」など、従来の伝統的な動機には見られなかったような、新しい動機が増えてきている⁴。さらには動機が多様化してきているということもいえる。

これは、団体遍路の数が減少し、個人または少人数の遍路が増大している傾向とも関連している。つまり四国遍路のあり方が、集団的、あるいは組織的なものから、個人的なものへと徐々にシフトしつつあるとみることができる。

このように四国遍路の動機もスタイルも多様化し、個人化してきているなかで、現代の四国遍路における「救済」観を考察することはいかにして可能であろうか。

そのための一つのヒントとなるのが、遍路記の分析である。近年では、出版物でもホームページやブログの形式でも、多くの遍路記が公開されており、我々はそれを読むことができる。個人の書いた遍路記の内容を丹念に分析することを通して、そこで描かれる個々の「救済」を読み取り、全体としての「救済」観に迫っていくというのは、一つの方法であろう。

現代の遍路はどのような救済を求めているのか。現代において「救われる」とはいかなることなのか。このような遍路記の内容の分析が、ひいては、救済概念そのものの問い直しへとつながっていくのではないかと考えている。

参考文献

長田攻一、坂田正顕、千葉文夫編、2007、『道空間のポリフォニー』 音羽書房鶴見書店

串間洋、2003、『四国遍路のはじめ方』 明日香出版社

河野昌広、2007、「現代の四国遍路—道空間の視点から—」『現代の巡礼—四国遍路と世界の巡礼— 公開シンポジウムプロシーディングズ』 「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会

-
- 1 四国霊場会は明治末頃成立したとされている。四国八十八ヶ所霊場会編「先達経典」、2006年。
 - 2 歩き遍路に特化した地図、「四国へんろひとり歩き同行二人」を編集、発行。
 - 3 四国遍路に関する代表的なホームページ、「掬水へんろ館」(<http://www.kushima.com/henro/>)を運営。
 - 4 昨年度の筆者の報告、「現代の四国遍路—道空間の視点から—」を参照されたい。